様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２８８５

研究課題名（和文）英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究―映像メディア分析と教育的活用

研究課題名（英文）A Comparative Study of Language Attitudes towards English in Japan, China and Korea

研究代表者
山口　美知代（Yamaguchi, Michiyo）

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：５０２５９４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本、中国、韓国においての英語に対する言語態度は、英語母語話者へのあこがれは共通しているものの、非母語話者（拡大円における英語学習者）としての自己および自国民の英語への態度は国による差異が認められる。日本においては、日本語母語話者の英語に対する批判的な態度が、中国においてより強い傾向がみられる。また、こうした英語に対する言語態度は、映像メディアにおいて、ユーモア、笑いの源泉として利用されることが多いことは、3か国において共通しているが、本調査ではとりわけ、日本と中国の差異が顕著で、中国語母語話者は中国語訛りの英語に対してより肯定的である。詳しくは研究成果内容報告ファイル参照。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、日本、中国、韓国で英語を学習する人々が、ネイティブスピーカーの英語や、自分たちの英語についてどのようなイメージを抱いているかを調査した。ネイティブスピーカーの英語にあこがれる傾向は、東アジアの3か国で共通して見られたが、自国の英語を批判的にとらえる傾向には、ばらつきがある。中国の英語学習者は、中国語訛りの英語について、日本人が日本語訛りの英語について抱くほど強い劣等感を抱いていない傾向がみられた。日本人が英語を自信をもって使えるための参考になる結果である。

研究成果の概要（英文）：This research has found that the language attitudes towards English in Japan, China and Korea share the similar tendencies that the learners of English are likely to admire native speakers' English, especially that of America and Britain. But the tendency to critically see their own English differs. Chinese learners of English tend to show more sympathy towards Chinese-accented English, than Japanese learners towards Japanese-accented English.

研究分野：英語学

キーワード：世界諸英語　アジアの英語　言語態度

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀後半以降、英語話者が地球規模で急速に増加するなか、とりわけ 1990 年代以降、世界諸英語(World Englishes)の研究は長足の進歩を遂げた。カチュル(Braj Kachru)の提示した内円、外円、拡大円内の各変種については個別的研究が進み、その特徴が詳細に記述されるようになった。世界諸英語研究と並んで、とりわけ地理的文化的に日本と関係が深いアジア地域の英語に関する研究も 1990 年代以降特に盛んである。学会組織としては、本研究の代表者・分担者が所属し、研究活動を進める日本「アジア英語」学会（JAFAE）が日本国内における代表的なものであり、また代表者が 2012、2013、2015 年と研究発表している AsiaTEFL は韓国に本部をおく主要な国際学会のひとつである。

日本で英語教育に従事する教員・研究者たちの学術交流団体は東アジア、なかでも韓国との連携を深めるところが大きい。一方中国に関しては、英語教育学会間の現時点では韓国との連携ほど強くないが、日本の高等教育機関や日本語教育機関への留学生の過半数(平成 26 年度 51%)は中国からの留学生が占めており（日本学生支援機構、平成 27 年 2 月統計）、後者も多くが日本の大学・大学院に進学して日本の英語教育に合流する。

本研究の研究代表者（山口）や研究分担者（小林、渡辺）がこれまで関わってきた科研費研究課題「世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語研究」（平成 25－27 年度基盤研究（ｃ））もこのような研究動向のなかで、世界諸英語と言われる各変種の特徴を明らかにして記述を進め、その英語教育への応用を企図するものであった。本研究も世界諸英語なかに位置づけられ、前研究課題をさらに深化、発展させるものとして始まった。

２．研究の目的

本研究の目的は、東アジア、特に日本、韓国、中国における英語観、英語に関する言語態度（表象、認識とステレオタイプを含む）を、質問票による量的調査、および、映像メディア（主に映画およびテレビドラマ）を主対象とする質的調査により分析すること、およびその比較研究から得られた知見を日本語母語話者の英語教育に活用する教材および教授法を提案することであった。

世界諸英語（World Englishes）研究が進むなかで、英語を外国語とする拡大円に属し、歴史や文化において日本と多くの共通点を持つ韓国や中国など隣国の英語との類似点と相違点を、社会言語学および映画英語教育学の視点から分析することは、日本の英語教育および東アジアの英語教育にも資すると考えられる。またこの研究は World Englishes 研究全般にも寄与するものである。

３．研究の方法

（１）言語態度に関する文献および調査に基づく理論的研究（担当：渡辺・小林・山口）

従来から行っている言語態度に関する社会言語学的研究を、東アジアの英語という視点をさらに明確にしながら継続する。日本、韓国、中国において自国や他国の英語に関する言語態度調査をする際の調査フォーマットを渡辺が中心となり、3 人で統一したものを作成した。この調査票をもちいて調査を行う。

（２）日本・中国・韓国の映像メディアにおける英語使用と言語態度の分析（担当：山口・小林・渡辺）

日本語、中国語、韓国語を主要言語としながら英語が用いられている映像メディア（映画、ドラマ）を渉猟し、その言語使用について分析記述する。

発表①

（３）英語圏の映像メディアにおけるアジア英語の表象と言語態度の分析（担当：山口・小林）

DVD 視聴などを通じて、英語母語圏で作成された映像メディア（映画、ドラマなど）のなかで、英語を母語としない話者（特に東アジア系）の英語がどのように表象されているか、分析記述する。その言語態度を考察する。

（４）調査内容の教育的応用に関する研究（担当：山口・小林・渡辺）

上記（２）（３）の成果に基づいて、具体的な映画・ドラマを取り上げ、大学の授業などでどのように活用できるかについて提案する。

４．研究成果

日本、中国、韓国においての英語に対する言語態度は、英語母語話者へのあこがれは共通しているものの、非母語話者（拡大円における英語学習者）としての自己および自国民の英語への態度は国による差異が認められる。日本においては、日本語母語話者の英語に対する批判的な態度が、中国においてより強い傾向がみられる。また、こうした英語に対する言語態度は、映像メディアにおいて、ユーモア、笑いの源泉として利用されることが多いことは、3 か国において共通しているが、本調査ではとりわけ、日本、韓国の事例が顕著であった。詳しくは以下の通りである。

（１）共通の質問票を使った言語態度の調査結果に関して，日本語話者については論文⑦、発表⑫、発表⑬が論じ，中国語話者については論文⑩、発表⑪がある。他に、文献や個別の質問

票による理論的論考として、論文④、論文⑪，発表⑥、発表⑦、発表⑨、発表⑩がある。

（２）日本語・中国語・韓国語の映画における言語態度、英語使用についての分析は、日本語映画については論文②、論文⑥、論文⑨、発表①、発表⑤、中国語映画については発表⑤、韓国語映画については発表③、発表⑤、発表⑧がある。また、映画における世界諸英語の描き方については、発表②、発表⑧がある。

（３）英語の映画における東アジア人の描き方、言語態度研究については、論文①、論文③、論文⑤、論文⑧、発表②、発表③、発表④、発表⑧がある。

（４）調査内容の教育的応用に関しては、公開シンポジウム「テレビドラマの外国語―京都育ちアメリカ人の役者人生」を開き、第一部、英語日本語のバイリンガル俳優ブレイク・クロフォード氏の講演、第二部、クロフォード氏に、渡辺、小林を講師に加え、山口が司会を行って、議論を行った。京都府立大学文学部国際京都学シンポジウムとして行い、300 余人の聴衆を得た。

上記（１）から（４）の成果については、今後書籍の形で刊行を予定しており、現在企画及び執筆を進めている。また、この研究は、2019－2023 年度科研費研究課題「アメリカ英語の普及と英語の多様性の認識に 20 世紀映像メディアが与えた影響」（代表者山口美知代、基盤研究（ｃ）、研究課題番号 19K00688）で、発展的に継続する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 山口美知代、トーキーの英語とイギリスの反応―1920 年代末のハリウッド映画をめぐって―、京都府立大学学術報告人文、査読無、Vol.68、2016 年、pp.1-17、https://ci.nii.ac.jp/naid/40021092052
② 山口美知代、『マイ・フェア・レディ』から『舞妓はレディ』へ―京都版リメイク映画の言語観、コルヌコピア、査読有、Vol.27、2017、pp.1-19
③ 小林めぐみ、アメリカ映画の中の日本、成蹊大学公開講座講演録、査読無、Vol.1、2017、pp.37-47
④ Yutai WATANABE、The conflation of /l/ and /r/: New Zealand perceptions of Japanese-accented English、Language Awareness、査読有、Vol.26、No.2、2017、pp.134-149、https://doi.org/10.1080/09658416.2017.1319849
⑤ 山口美知代、トーキーの登場と外国訛りの英語、京都府立大学学術報告人文、査読無、Vol.69、2017 年、pp.43-66、http://id.nii.ac.jp/1122/00006101/
⑥ 山口美知代、連続テレビ小説『あさが来た』の英語、コルヌコピア、査読無、Vol.28、2018
⑦ 渡辺宥泰、日本語訛りの英語に対する言語態度―先行研究と進行中プロジェクト、英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究 2017 年度研究成果報告書、査読無、2018 年、pp.1-19
⑧ 小林めぐみ、ミスター・モトと「日本人英語」のイメージ、英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究 2017 年度研究成果報告書、査読無、2018 年、pp.20-38
⑨ 山口美知代、『シン・ゴジラ』の英語―日本人が演じるパタースン特使への反応、英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究 2017 年度研究成果報告書、査読無、2018 年、pp.40-61
⑩ 山口美知代、中国語話者の英語に対する言語態度―日本語専攻大学院生の事例、京都府立大学学術報告人文、査読無、Vol.70、2018 年、pp.59-71、http://id.nii.ac.jp/1122/00006161/
⑪ 渡辺宥泰、日本語訛りの英語―その識別と指標性、異文化の諸相、査読有、Vol.39、2018 年、pp.5-18、http://nihoneigobunka.jellybean.jp/studies39.pdf#page=7

〔学会発表〕（計 13 件）

① Michiyo YAMAGUCHI、Language attitudes in *My Fair Lady* and its Japanese adaptation、AsiaTEFL、2016 年
② 山口美知代、方言とステレオタイプ―『オン・ザ・ハイウェイ』の浮気夫がウェールズ英語を話す理由―、映画英語教育学会、2016 年
③ Michiyo YAMAGUCHI、Cross-linguistic humor in ELT、Society for Teaching English through Media、2016 年
④ 小林めぐみ、アメリカ英語のなかの日本、成蹊大学公開講座、2016 年
⑤ 山口美知代、外国語使用で笑い効果を出す映画―『ヘンリー五世』から『シン・ゴジラ』まで、日本笑い学会（招待講演）、2017 年
⑥ 渡辺宥泰、The concept of EIL in the *Suggested Course of Study in English* (1947/1951)、日本英語文化学会、2017 年

⑦ 渡辺宥泰、English as a lingua franca in Japan: A brief comparison with Mainland Europe、日本英語文化学会（招待発表）、2017 年
⑧ 小林めぐみ、映画を通して学ぶ World Englishes、JACET 関東支部、2017 年
⑨ 渡辺宥泰、ELF/EIL and the ideologies of English education in Japan、英米文学語学研究会、2017 年
⑩ 渡辺宥泰、EIL and ENL: A reconsideration of the *Suggested Course of Study in English* (1947/1951)、日本「アジア英語」学会、2017 年
⑪ 山口美知代、中国人学生の英語に関する言語態度調査、日本「アジア英語」学会、2018 年
⑫ 渡辺宥泰、Japanese ideologies towards L2-accented English: A case study in EMI settings、日本「アジア英語」学会、2018 年
⑬ 小林めぐみ、Student perceptions of on-line English conversation lessons from pedagogical and World Englishes' Perspectives、日本「アジア英語」学会、2018 年

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：小林めぐみ
ローマ字氏名：Megumi KOBAYAHI
所属研究機関名：成蹊大学
部局名：経済学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：50339587

研究分担者氏名：渡辺宥泰
ローマ字氏名：Yutai WATANABE
所属研究機関名：法政大学
部局名：グローバル教養学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：60240529

(2)研究協力者
研究協力者ローマ字氏名：Robert MacKenzie 博士
所属研究機関名：英国　ノーサンブリア大学

研究協力者ローマ字氏名：Hikyoung Lee 教授
所属研究機関名：韓国　高麗大学

研究協力者ローマ字氏名：Geoff Lindsey 博士
所属研究機関名：英国　ロンドン大学ユニバーシティカレッジ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。